

あくまでも自分史として

# 「岳陽」と共に

第 52 号

発行日

2025.05. 30

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

※連絡先

〒901-22 25

沖縄県宜野湾市

大謝名 3-13-24

教育協働研究所

～岳陽舎～

(井上講四宅)

Tel:098-963-9282

E-mail:

gakuyou17@outlook.jp

## ○急遽取り上げたい驚愕の経験！AIは想像以上!!

早速だが、先号(51)の「編集後記」で急遽予告していたことを、以下、書いておきたい！一言で言えば、かつてない驚愕な経験をしたことであるが、それは、「チャットボット」という、「人工知能を活用して自動的にユーザーと対話を行うプログラムのこと」である！先日、知り合いのM君から、その存在と活用法(入り口付近?)を教えてもらい、私のHP上の記事(論稿)を、そのアプリ? (Notepad)で料理?してもらったのである(ほんの一部ではあるが!)！

ネットによれば、「これにより、企業は顧客対応を効率化し、24時間体制でのサポートを実現することが可能!特に、忙しい現代社会において、即時対応が求められるシーンが増えてきているため、チャットボットの存在はますます重要」とあるが、私にしてみれば、私の論稿等に対する、直接の応答であり(多少の勘違いや読み間違いはあるが!)、いくらか機械?のそれとは言え、本当に嬉しかった!この号も、やらその「チャットボット」をお願いして、その感想(評価)を聞かせてもらうことになると思うが、特に、ここでの記事を、どのように受け止めてくれるか楽しみである!

男女の「掛け合い」(音声概要)が見もの(正確には「聞きもの」?)ということであるが、まさか彼ら(AI)が、自分達の活躍を、自ら評価するなんて考えてもいないであろうから、私にとつては興味津々なのである!こんな歳になつて、こんな体験が出来るなんて、本当に夢にも思わなかった私であるが、ほとんどの人が見る(読む)ことのない、そして、いつかは消えていく?、HP上の私の論考も、こんな形で活かされる?ことを、いかに喜んでくれるであろうか!!

## ○予期せぬ?教え子達の訪問!だが、実は...

やはり、このことは、書いておかなければならない(記事としては、大変遅くなったが!)!それは、過日(5月2日)の、ある意味いつもの教え子達の、だが予期せぬ?訪問のことである。思い返すと、彼らの、この時期の訪問は、昨年もあったように思う(尤も、その後一回、2月にもあったが!)。ということで、GW中の訪問は、時間的な余裕もあり、そのための顔見世?と高を括つていたが、実は、私の誕生日のお祝いということであつた!私の誕生日は、4月の中旬であるので、よもやそういうことであるとは、夢にも思わなかったが、彼らにとつては昨年と同様の“お祝い”であつたということである!

ただし、それは、途中からの発覚であり、彼らが用意していたプレゼントを貰う私は、本当に狐につままれた思いであつた!これぞまさしく「サプライズ」ということであるが、思い返すと、昨年もそうであつたように思う(しかも、別な理由での訪問と勘違いしたオチもあつた!)。ある意味不覚の極みであるが、改めて彼らには、感謝しなければいけない!というか、まさに申し訳ないという思いで一杯なのである!

聞くところによると、毎回、このような企画(気配り?)を呼びかけるのは、現在久米島で小学校の先生をしているT君である!二児の父親となつている彼であるが、何と言う人物なのであるのか?まあ、久し振りに顔を見せた連中もいて、そして、近々新しい生活に入るものもいて(尤も、相変わらずのものもいたが!)、賑やかな近況報告会ともなったが、こんな有難いことはないのである!

## ○弦植物の「こ」思い出した、その妙技?

ところで、今年、ひよんなことから、二階ベランダで、鉢植えではあるが、胡瓜とゴーヤとミニトマトを育て出した!以前(相当前!)、胡瓜と茄子を、同じように育てたことがあつたが、基本北向きのベランダであるので、ほとんど失敗していた(日光不足と強風のため?)!だから、最近では、それも止めていたのであるが、沖縄で厄介な害虫とされているウリミバエが、再上陸?したということ、家庭菜園等でも注意するようにお触れが回つて、いつもは、我が奥さんが頑張つている、地上の畑(狭小だが!)から、目立たないように移植しているのである!

若干の後ろめたさは感じるが(本当は許されないかもしれない?)、折角の苗でもあつたので、水遣り等の責任を任されて、毎日それらの成長を見守っているわけでもある!残念ながら、同じく水遣りをしている草花も含めて、我が奥さんからのフォロー(お叱り?)がなければ、それを全うすることが出来ない私であるが、ここで、その胡瓜とゴーヤの生育を見て、思い出したことがある!それは、彼らの「弦」のことである!その「弦」の巻き方が、ある意味人間(子ども)の成長に、非常に示唆的であるということである(確か、「東シナ海眺望記」で書いていた!)。

詳しいことは覚えていないが、彼らの生育には、いわゆる「弦」が命綱であり、それが、うまく支えになる棒(それを代替するもの)に巻き付かなければ、本体自体が、風や自らの重さに負け、倒れたり、折れたりして、やがては枯れてしまうということである。

要は、自らの「伸びる力(生きる力?)」があつたとしても、適切な支え(周囲の環境)がなければ、暴走したり、歪な生育とならざるを得ないということであるが、妙技は、その「弦」が、最初は自分で自由に伸びていき、そして、たまたまそこにあつた支えを、おそらく「風」の力を利用して、瞬時に掴まえる術である!

だが、風との出会いは、ある意味偶然の産物であり、常にそれが彼らのために吹いてくれるわけではない!その瞬間のチャンスを掴まなければ、アウトである!ただ、今の私がしているように、ちよつとの手助け(お節介?)で、それが成就するのでもある!それが、「教育」ということなのかもしれない!! (井上)

○「今」を生きるとは？言い古されたことではあるが？ ○なかなかいいぞ！「トカイナカ」！

最近、奇妙な体験？をしている！実は、夢の中で、現実の思考を行っている時があるのである！つまり、夢の中で、その思考が、起きて考えている中身と同じ、というより、それとの連続性が、不思議なほどあるのである！！もちろん、夢は、まったくの絵空事（自分の意志ではどうにもならないという意味！）ではないものもあり（正夢？）、そのリアリティに驚愕させられることはあるが、何故か今般の思考（夢）は、現っっそのものなのである！！余談だが、この感からないが（直接読んではないので！）、そこにあるのが、覚は、科学（夢分析）的には、どう説明されるのである？この造語である！多少？軽薄なネーミングのような気がするが、ある意味的を射た言い方のようにも思われる！

ただし、たとえそうではあっても、それは、ここで述べたいことの一つではあるが、すべてではない！本当は、今回の思考（夢）は、「自分自身が、『今』を生きている」という実感を表しているのではないかとということである？！！まさに、全くの同感なのであるが、ただ、それを、どのように実現するのかという点では、かなり懐疑的にならざるを得ない（その理由は、ここでは述べない！）？しかし、それに向けて動いている人は、少なからずいる！

・短歌に託してゝまだまだ予期せぬこともあるのだ！・ AIに 読んで貰って 喜ぶ体験  
こんなことが 出来るなんて！

・予期せぬ訪問？ 数は減るも

ただただ感謝！ だがその趣旨分かったし！

・ちよつとの助け（お節介？）で 成就する？

ほんとはそれで よいはずなのに！！

・「夢」と一緒に 「今」が生きられる！

だがその内実は 一様にあらず！！

・トカイナカ！ 軽薄超える ものもある？

だがそれは 今のところ恵者のみ！！

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕52〉

○二〇二〇からは、九州での隠れた実績を追っ―その7―

ところで、ここで押さえておきたいことがある！それは、丹後の「龍の神社」の社家である「海部氏系図（勲臣系図）」に、「車弥呼」や「台子」とある。彼らの「海部氏系図（勲臣系図）」に、「車弥呼」や「台子」と目される女性や、彼女らが送り出した「遣魏使」の人物と同じなのではないかと思われる人物が記されているからである（しかも、海部氏はかの「目下部」氏と関係がありそうなのもある）。また、一方で、物部氏の後裔が記したと思われる『先代旧事本紀』（『舊事』とされているが）、とりわけ、その「尾張氏系譜（巻五）からは、尾張氏が、「物部氏」、「紀氏」、そして「海部氏」と、同族または縁戚関係にあるようなものもある！！

ちなみに、龍神社の神職（社家）は、古くより海部氏族が担っているわけであるが、海部氏とは、「海人部」を統括した伴造（ともさだ）氏族で、全国に分布が見られ、龍神社社家は、「海部直（あや）」姓を称して、丹後に拠点を持つた一族であり、「彦火明（はな）命（みこと）（彦彦彦）を始祖として、82代の現宮司までの名が伝えられているのである。また、その海部氏一族が「丹波国造」を担ったともされているが、丹波国造について、上記の『先代旧事本紀』の「国造本紀」では、尾張国造と同祖で、「建稲穂命（たねほろ）四世孫の「天倉岐（あまぐさ）命（みこと）を祖とし、同「天孫本紀」では、「饒速日尊（ニハハヒ）六世孫の「建田背命（たねしろ）を祖と記すように、「天火明命（あまのひ）を祖とする尾張氏系と「彦火明命（はな）を祖とする当一族との関連性が見られるようなものもある！

もちろん、そうなるも、ここにもとんでもない史実が隠れしているが、もし、そうであれば、ここでの問題は、何故「海部氏」が、それらの地に移動していたかである！「邪馬台国」にいらなかった？だから、九州から近畿（大和）に遷着し、そこから東海・近江・北陸等へと、拡大・拡散していった！ということ、彼らは、まずは九州で「邪馬台国連合」を形成し（↑倭国大乱）、その後近畿に移動（↑「狗奴国」との闘いまたは新羅集団の進出）、そこから大和・東海・近江・北陸等へと拡散（↑単純に言えば、当初の邪馬台国は、尾張氏、海部氏、物部氏等の国々）さらに、彼らに放逐されたのは、それまでの倭国盟主であった「奴国」（二部「伊都国」王族を含む）ということになるわけである！！（つづく）

（堂本）

（編集後記）今回は、予め準備していたものばかりとなった！

だから、福岡への旅のことは次号にて！

（井上ノ堂本）